

# 大乘思想とは

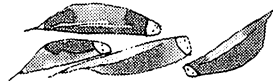
平 川

彰

世間では「大乘の見地に立って、小異を捨てて大同につく」などと言います。これは小事に拘泥しないで、大局のために事を決することを言うのです。大乘佛教には、このように「小事に拘泥しない」とか、「大局的立場に立つ」というような意味があると思います。

とくに法華経にそういう思想がはつきり現れています。法華経には「会三歸一」といって、それまでの大乘佛教で、声聞乘・縁覚乘・菩薩乘は、そ

れぞれ別であると考えていたのを変えまして、これらの三乗は同じ一乗佛教であることを明らかにしています。すなわちそれまでの大乘佛教では、声聞乘・縁覚乘・菩薩乘は、教理も異なっており、その教理を実行する修行の心構えもちがっており、したがって修行の結果得られる「悟りの果」も、それぞれ別であると主張していました。とくに声聞乘の修行者は自利のみを考えており、こころざしが卑しく、衆



生を救済せんとする大悲の心を欠いていると非難してしまいました。しかし「小乗」を捨ててしまうようでは、真の大乗とは言えないわけです。この点に気がついたのが法華経です。

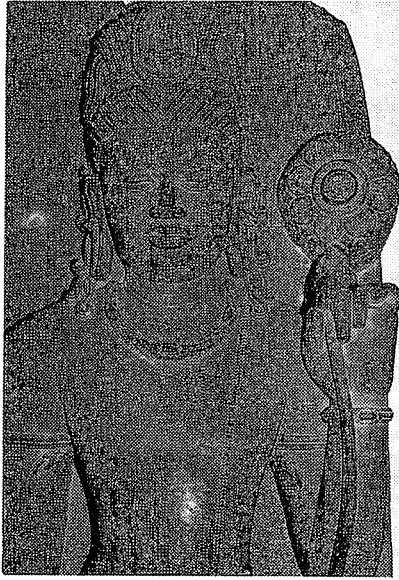
法華経では、すべての人が成佛できると主張しています。その根拠は、すべての人に「佛性」があるからです。誰でも自己に佛性があることを信じて、修行をすれば成佛できるという意味です。法華経には、まだ「佛性がある」とはつきり言っていないませんが、「佛の子である」という思想があります。舍利弗が法華経の会座で、佛の説法を聞いて、佛陀の大慈悲を理解しまして、「自分も佛子である」との理解を持ちました。佛の子であれば、成長して「法王子」となり、灌頂を受けて、佛の位につくわけです。そのために、舍利弗が「佛子」の信念を持ったときに、釈尊は、舍利弗が将来「華光如来」という佛陀になるであろうとの「当来作佛」の記を授けられたのです。これを「声聞作佛」といいまして、それ以前の大乗

經典では説かなかったことであります。このように法華経には、「声聞でも成佛できる」という教えが示されておりまして、誰でも自己に佛性があることを信じて、その佛性を成長発展させ、成佛を実現するために努力することが「佛教」であると示しているわけです。このように声聞・縁覚・菩薩の区別なく、すべての人が「成佛」のための修行をすれば、「教えは一つ」でよいわけです。この「教えは一つである」という考えを、「一乗」というのであります。「一乗」とは、「一つの教え」という意味でして、「三乗」が、佛の教えは三種類あると見るのにたいして、三種類あると見るのは方便であり、佛の真意は、成佛の教え一つだけ説いたのだと見ているのです。この、三乗と見るのは方便であり、一乗と見るのが真実であると解釈するのを、「三乗を会えして、一乗に帰する」というのです。三乗を捨てないで、拾い上げるのです。このように一乗の思想は、三乗を一乗に引き上げる広い立場を持っていますので、

一乗こそ大乘であるという思想がありまして、「一  
大乘」とか「一佛乘」というのです。

このように一乗という思想は法華経になって、は  
じめて現れた思想でありまして、それ以前の般若経  
や維摩経・阿閼佛国経などにはまだ現れていません。  
しかし「一乗」という言葉は、般若経にも出ていま  
すので、法華経とはちがう意味で、「一乗」の語が  
用いられていたわけです。般若経には、たとい地獄  
に落ちることがあっても、声聞乗や縁覚乗に墮して  
はならないと言っています。地獄に落ちても、再び  
この世に生れてきて、菩提心をおこして、成佛のた  
めに修行することができ、しかし声聞乗・縁覚乗  
に墮してしまうと、自利の修行だけをして、無余依  
涅槃に入ってしまったって、永久に成佛の機会を失うと  
いうのです。このように声聞・縁覚を否定する思想  
が、般若経や維摩経等に強調されていますから、三  
乗を総合して一乗に誘引するという一乗の思想は、  
法華経になってはじめて成立したと見てよいのです。

しかし「大乘」という思想は、般若経や維摩経等  
にも現れています。故に「大乘」という思想は、法  
華経より前からあったわけです。したがってその  
「大乘」の内容は、一乗とはちがう思想であったわ  
けです。大乘經典のうちで、最も成立の早いのは般  
若経であります。その般若経の中でも最も成立の  
古い道行般若経に「摩訶衍まかえん」という言葉があります。  
これは「大乘」という意味です。道行般若経は大乘  
佛教の最初の經典ですから、それ以前に大乘の經典  
があったわけではありません。したがってこの道行般  
若経で、はじめて大乘の思想が示されたわけです。  
それ故、道行般若経の意味している「大乘」は、道  
行般若経自身の示している大乘思想であるわけです。  
それならば道行般若経では、何を大乘と言ってい  
るのかといえます。般若波羅蜜を大乘と言ってい  
るのであります。般若経は、般若波羅蜜を発見した  
ので、それをそれまでの佛教と区別するために、「大  
乗」と呼んだのであろうと思えます。「般若」とは、釈



インドの菩薩像

尊の悟りの「智慧」を指すのです。そしてそれを実現する「修行道」が波羅蜜パラミタであります。すなわち、般若教徒は自らの発見した「般若実現の修行道」を「般若波羅蜜」と呼び、これを「大乘」と名づけたのです。なお「波羅蜜」の語義は「完成」という意味です。ともかく「大乘」といいますが、いろいろな意味があるのでして、ここでは佛の悟りを「大乘」というわけですが、般若教徒はこれを「般若波羅蜜」に名づけ、法華経では「一乗」を大乘と呼んでいる

のです。したがって「大乘佛教」というきまっただものがあられるわけではないのです。すなわち私共は、いまから一千年以上に、インドに現れた多数の大乘経典を見ておりますので、それらの大乘経典に説かれている教理を総合して、それを大乘佛教とか大乘思想と理解しているのですが、しかし実際に大乘経典を述作していた菩薩たちは、自己の著わした経典の中に示された思想こそを、「大乘」であると主張せんとしていたのであろうと思います。

例えば勝鬘経には、「撰受正法」は「波羅蜜」であり、「大乘」であると言っています。そしてさらにこれは如来の「法身」であると説いています。さらにこれを「一乗」であるとも説いています。勝鬘経は般若経や法華経のあとを継いで現れた経典でありますので、それらの思想を受けついで、さらにその上に、この経の説く如来蔵の思想を、大乘佛教の正系に位置づけようとしているのであろうと思います。すなわち勝鬘経では「撰受正法」ということを重視

していますが、その「正法」とは佛性のことでして、すなわち自己に佛性がそなわっていることを信じ、片時も忘れないことを「摂受正法」と呼んでいるのです。すなわち自己に佛性があることを信じて修行することが、摂受正法であり、大乘であり、波羅蜜の修行であるという意味です。しかし般若の智慧といいますが、凡夫には知られないのですから、それが自己の心中に「佛性」として内在していることを信ずることが、何より大切であると考えられています。そしてその佛性を摂受して、一刹那も忘失しないのが「摂受正法」であり、大乘の実践であるといえるのです。「正法」には、「正しい教え」という意味もあります。また、「法」とは真理のこととして、真理を佛教では「真如」といいます。この真如が自己の人格と一つになっているのが「佛性」であるわけですが、般若経では般若波羅蜜を大乘と言っていました。般若波羅蜜は悟りの智慧と同じですから、これを佛性とも言うことができます。しかし佛性は、凡夫に

おいては煩惱にかくされていますので、これを如来蔵というのです。そしてこれは自心の中に見ることができないのですから、あることを「信ずる」だけです。それが「摂受正法」の意味であります。そして勝鬘経ではこれを「大乘」とも呼んでいるのです。これと同じ思想的立場に立っているのは「大乘起信論」であります。大乘起信論とは、大乘に信をおこす論という意味です。この場合の「大乘」とは、大乘佛教の意味ではないのでして、「衆生心」を大乘と言っています。「衆生心」とは、衆生の心、すなわち「凡夫の心」の意味です。われわれ凡夫の心に、佛陀になりうる力がそなわっています。その力を起信論では「無量の性功德を具足する」と言っています。性功德とは、変らない性質という意味です。私共の心には、いまは力を現わしていませんが、磨けば光をあらわす玉のように、すぐれた素質がかくされています。その、心にそなわる偉大な性功德を「大」というと述べています。しかも私共の心には、

努力と修行とによって、この性功徳を切磋琢磨し、成佛にまで私共を運んでくれる「力」がそなわっています。この「迷いから悟り」へ私共を運ぶ力を「乗」といいます。つまり私共の心には、無量の性功徳としての「大」と、成佛にまで自己を高める「乗」との「二つの力」があるのです。そのためにわれわれの「衆生心」を「大乘」というのであると示しています。そして衆生心における「大乘」は、現実の私共には知られていませんが、しかし、大乘が自己の心にそなわることを信じて努力する必要があるののでして、そこに「人生の真の目的」があると

言わんとするのが、大乘起信論を著わした著者の目的であります。即ち「大乘に信を起さしめる論」という意味であります。

以上のように、佛教において「大乘」とは、単に「大乘佛教」という意味だけでなく、いろいろな意味があるのでして、そのなかでもとくに、佛の悟りの智慧（般若）や、佛性・如来蔵等を「大乘」と呼んでいる經典があることは注目すべきであると思います。大乘の菩薩たちが、大乘經典を著わして、人びとに示さんとした目標がそこにあると思うからです。

(東京大学名誉教授)

## お役に立てば幸せです

津門株式会社

西宮市津門大塚町六番二十五号

電話 〇七九八 六五二七三一(運 輸)

二二二二二四(本 社)

二二二二二九六(フイード部)